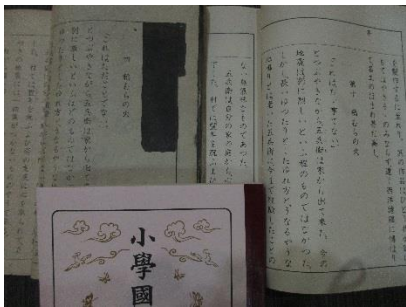


「稲むらの火」は広く繋がる

「稲むらの火」は、益々広く繋がっています。日本全国へ、世界へ広まっています。主人公「濱口梧陵」の偉業を教訓として、いろいろの分野で浸透しています。

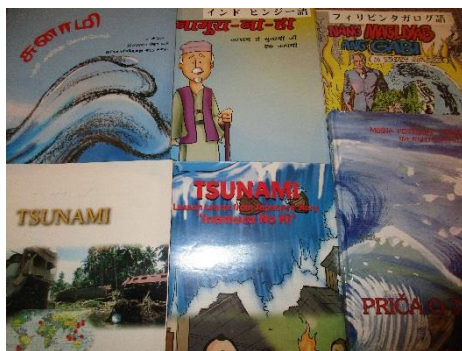
かつて、昭和12年から22年までの間5年生の国語の教科書に掲載されました。あの頃の教科書は国定教科書ですので、5年生であれば、全国でこの教科書を勉強したのです。この事によって、「稲むらの火」



が全国で認知されたと言って良いでしょう。

平成16年のスマトラ沖地震・インド洋津波の後には、津波防災の精神を伝えようと、「稲むらの火」の物語をベンガル、ヒンディー、タミル、ネパール、シンハラ、タガログの各言葉に翻訳して日本から各国へ送られました。更に民間有志がクロアチア語やエスペラント語の書籍もつくられました。「稲むらの火の館」館内も3D映画や展示が、英語、中国語、韓国語、仏語、インドネシア語、スペイン語の各国語で理解していただけるようになりました。

東日本大震災の直後には、我が国で「津波対策推進法」により、11月5日を「津波防災の日」に制定され津波避難訓練等が実施されています。この日が国連で「世界津波の日」に決められて以後、世界中で津波防災の運動が推進されています。



日本国内でも、紙芝居「津波だ 稲むらの火

を消すな」が制作され、「稲むらの火の館」も制作機関から委託され200部以上を学校等へ配布しました。昨年の「世界津波の日」には当館で浪曲「稲むらの火」の初御披露目もありました。全国的には、ミュージカル、人形劇、影絵劇等でも上演されているそうです。

30年以内に「南海トラフ巨大地震」が70～80%の確立で起こるといわれている昨今、犠牲者を減らすために、「稲むらの火」が幅広く活用されているのです。

~~~~~

## 「MORGEN」5月号に掲載

「モルゲン」という月刊の新聞があります。ドイツ語で“明日”という意味です。

東京大学名誉教授の月尾嘉男先生が、「清々しき人々」というコーナーを連載されています。5月号に第20回目として「濱口梧陵」を取り上げていただきました。4月初旬に取材に来られ、この程、発刊されました。全国の高校、中学校や図書館等に対して15万部発行されているそうです。先生と生徒が共有して、読書を柱とした、人間の生き方を考える新聞だそうです。こうした新聞にも「濱口梧陵」が取り上げていただいたことは、たいへんうれしいことです。



## 「昔の風景写真」募集しています

以前にも、皆様をお願いをしました。皆様のお宅に昔の広川町の風景写真はありますか。特に「稲むら」(すすき)が入った風景などありましたら、たいへんうれしいです。スキャナーさせていただいて、写真はお返しします。よろしく願います。また、昔の手紙などの古文書類もあれば、拝見させていただきます。

濱口大明神縁起(その17)

濱田康三郎 (かわせみより)

以上は一八五四年の広村の大津波そのものの大体の輪郭であります。～話の序ではあり、ハーン氏の省略せられたその後日談を若干付け加えさせて頂きましょう。何故かと云えば、打ちあけて申せば、大津波の当夜のこともこと乍ら、父としては、村の人々のためのその全力を尽したのは、皆様も容易に御推察下さるであろう通りに、大災害直後の村民の救済とそしてそれからの村の復興とであったからであります。

大津波の翌日の六日、翌々日の七日にも、余震はなお止まず、人々はその恐怖に戦くと共に、眼前の災害を歎ずるばかりで、村の後始末にとりかかろうとする元気も出ませんでした。それで父はその後毎日罹災者の間を駆け回って、或は慰め或は諭し或は励まし、同族の者達と協力して百方当面の救護に努めました。先ず仮小屋を設けて罹災者の一部分を収容し、自ら救護米二十俵を出して近隣の村々の義捐を乞い、人々に命じて村内の大整理をさせ、そしてそれから、住むに家なく耕すに田畑なく漁刷るに舟も漁具もなくなって、明日の生計を立てる術を失った窮民達のために、急いで五十軒の住家を新築してこれを提供し、農漁夫には農漁具、商人には身分に応じた資金を、それぞれ貸与して、自立の途を講ぜしめました。

けれども、それ程にまでしてなお村民の間には、あまりに凶暴であった大津波の打撃に懲り果てて、此の土地を恐れ厭い、他郷へ移住しようとするものが次ぎ次ぎにあらわれました。もともと紀州の此の地方は日本の有名な地震地帯の一であり、従ってその海辺に位する此の付近一帯は、昔からしばしばこれら海底の地震によって引起される津波の来襲を受けて居たのであります。地勢の関係上、広村の被害は常にどの隣村に較べても遙かにより甚大であったのです。それが又しても今度のこの徹底的な大災害なのでした。村民の多数が村に見切りをつけ、他郷へ移住を志したのは、強ちに無理で

はなく、そうでないものも、誰一人として此の儘の村の住居に心を安んじ得ませんでした。村の衰微、滅亡のきざしは日一日と顕著になりました。父は此の様子を見て、村民の安全と幸福とを永久に保証するためには、是非ともに将来の如何なる大津波に対しても十分にその能力を発揮し得る堅固な大堤防——古くからある高さ一間半程のもの丈で安心のならないのは、既に証明済となったのであります——を完成しなければならぬと、考えつきました。そして祖先以来の郷土を熱愛する一念から、莫大な費用を要する可きを覚悟の上、敢然独力でこの大事業を計画し、同族の一人(濱口吉右衛門)を説いてその賛成を得、官に乞うて許可を受けた後、翌五五年(安政二年)二月からいよいよその工を起こしました。(つづく)

\*\*\*\*\*

<ワダイの防災カフェの御案内>

和歌山大学災害科学教育研究センターでは、県内4会場で、8回の「ワダイの防災カフェ」を開催されています。稲むらの火の館でも、昨年につづいて本年も開催されることになりました。本年は、下記のとおり2回開催されます。

「防災カフェ」は、通常の講演会とは違って、講師の先生の話とともに、参加者も質問や意見をだして、参加者皆で防災を語り合うものです。募集人員は、各回とも20名程度と制限があります。少数の参加者で語り合うものです。

第1回 6月16日(土)13:30~15:00

第2回 7月21日(土)13:30~15:00

参加御希望の方は、「稲むらの火の館」までお問合せください。

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

\*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

\*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

(世界津波の日の11月5日は開館)

年末年始(12/29~1/4)

\*記念館だけの入場は無料です。